

<特集「否定、形容詞と連体修飾複文」>

フィンランド語の否定、形容詞と連体修飾複文 Negation, Adjectives and Adnominal Complex Sentences in Finnish

坂田 晴奈
Haruna Sakata

東京外国語大学非常勤講師
Part-time Lecturer, Tokyo University of Foreign Studies

要旨: 本稿は特集「否定、形容詞と連体修飾複文」(『語学研究所論集』第23号, 東京外国語大学)に寄与する。本稿の目的は33個のアンケート項目に対するフィンランド語データを与えることである。

Abstract: This report contributes to the special cross-linguistic study on ‘negation, adjectives and adnominal complex sentences’ (*Journal of the Institute of Language Research* 23, Tokyo University of Foreign Studies). The purpose of this paper is to offer the Finnish data for the question of 33 phrases.

キーワード: フィンランド語, 否定動詞, 形容詞, 連体修飾節

Keywords : Finnish, negative verb, adjective, adnominal clause

1. コンサルタント情報

本調査においては、以下のフィンランド語¹コンサルタント2名にご協力いただいた。

氏名 : A 氏

性別 : 女性

生年月 : 1964年12月 (2019年5月現在54歳)

出身地 : フィンランド・トゥルク市 (Turku)

母語 : フィンランド語トゥルク方言

備考 : フィンランドに在住, 英語を理解する

氏名 : B 氏

性別 : 女性

生年月 : 1991年6月 (2019年5月現在27歳)

出身地 : フィンランド・トゥルク市 (Turku)

母語 : フィンランド語トゥルク方言

備考 : A 氏の娘, 日本人配偶者と共にフィンランドに在住, 英語と日本語を理解する



本稿の著作権は著者が保持し, クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

¹ フィンランド語はウラル語族, フィン・ウゴル語派, バルト・フィン諸語に属する膠着語である。名詞の格変化が15種あり, 動詞は人称(単数, 複数の1~3人称の他に受動形という不定人称形がある), 時制(現在, 過去, 現在完了, 過去完了), 法(直説法, 条件法, 可能法, 命令法)によって語形変化する。また, 否定動詞という人称活用をとまなう否定形を持つのが特徴である。基本語順はSVO, 修飾部先行型で, 概ね後置詞型である。表記は全て正書法に基づく。

2 名とも首都ヘルシンキから南西に 160km ほどのトゥルク市出身で、母語もトゥルク方言であるが、本調査において方言の影響は特にないと思われる。媒介言語は英語と日本語である。例文を提示していただく際は、英語文と日本語文を示しながらその文が表す状況を説明して調査した。

例文のグロスに関しては基本的にライプツィヒグロスおよび Hakulinen 他(2004)の術語に従う。グロス中の英訳はインターネット上の辞書“EUdict” (<http://eudict.com/>)のフィンランド語・英語辞書を参照した。

2. 否定、形容詞と連体修飾複文に関する調査結果

以下、否定と形容詞、および連体修飾複文に分けて調査結果を示す。

2.1. 否定と形容詞

(1) これは私の本ではない。[名詞述語文／コピュラ文の否定]

Tämä ei ole (minu-n) kirja-ni.
this:NOM NEG.3SG be:PRS 1SG-GEN book:NOM-POSS.1SG

否定文においては否定動詞が用いられる。この否定動詞には人称による語形変化がある。(1)のように 3 人称単数を主語とする場合、否定動詞は ei である。本動詞であるコピュラ (動詞 olla 「ある、いる」) は人称語尾を失った形式で現れる。

(1)のような所有表現には名詞の属格形が用いられるが、人称代名詞が所有者となる場合は所有接辞も用いられる。(1)においては、1 人称単数の所有者を表す所有接辞-ni が名詞に後続する。人称代名詞の属格形 minun は任意であるが、強調などの意図がない限りは省略される。

(2) この部屋には椅子がない。[存在文の否定]

Tässä huonee-ssa ei ole tuoli-a.
this:INE room-INE NEG.3SG be:PRS chair-PART

「[場所] に [物体・人物] がある (いる)」という文は存在文と呼ばれ、文頭に場所格を伴う名詞があり、存在する物体や人物は主格名詞によって表される。ただし否定文の場合、名詞は分格形という形になる。分格はフィンランド語の格変化の一種で、直接目的語や物質名詞 (液体など個別に分けられない名詞) につくなど様々な用法を持つ。否定文における直接目的語は必ず分格形になるが、動詞の種類によっては肯定文の直接目的語も分格形になりうる。

(3) この部屋には一つも椅子がない。[全部否定・モノ]

a. Tässä huonee-ssa ei ole ainut-ta-kaan tuoli-a.
this:INE room-INE NEG.3SG be:PRS only-PART-PC chair-PART

b. Tässä huonee-ssa ei ole yhtä-än tuoli-a.
this:INE room-INE NEG.3SG be:PRS one:PART-PC chair-PART

「一つも～ない」を表すのは ainuttakaan, yhtään といった語である。これらは基本的に否定文で用いられる。意味の違いはほとんどない。

(4) その部屋には誰もいない。[全部否定・ヒト]

a. Siinä huonee-ssa ei ole ketä-än.
 it:INE room-INE NEG.3SG be:PRS who:PART-PC

b. Kuka-an ei ole siinä huonee-ssa.
 who:NOM-PC NEG.3SG be:PRS it:INE room-INE

(4a)は存在文で, ketään「誰も」は分格形である(主格形は kukaan)。(4b)は存在文ではなく, 単に kukaan を主語にした文とみなされ, 否定文でも kukaan は分格形にならない。全部否定の場合, モノもヒトも文構造は同じである。

(5) その本はこの部屋にない。[所在文の否定]

a. Se kirja ei ole tässä huonee-ssa.
 it:NOM book:NOM NEG.3SG be:PRS this:INE room-INE

b. Tässä huonee-ssa ei ole sitä kirja-a.
 this:INE room-INE NEG.3SG be:PRS it:PART book-PART

コンサルタントによると, (5a)と(5b)の違いは「本」と「部屋」のどちらを強調するかという点である。(5a)が(5)の日本語に近いと思われる。(5b)は存在文である。

(6) この犬は大きくない。[形容詞文の否定]

Tämä koira ei ole iso.
 this:NOM dog:NOM NEG.3SG be:PRS big:NOM

日本語とは違い, 形容詞そのものを否定形にすることはできない。コンピュータの役割を果たす動詞 olla 「ある, いる」を用いる。

(7) この犬はあまり大きくない。[形容詞文の部分否定]

Tämä koira ei ole kovin iso.
 this:NOM dog:NOM NEG.3SG be:PRS very big:NOM

部分否定の場合は「とても」のような意味を表す程度副詞を形容詞に前置する。英語などと同様の方法である。

(8) この犬はあの犬より大きい。[比較級]

a. Tämä koira on iso-mpi kuin tuo koira.
 this:NOM dog:NOM be:PRS.3SG big-CMP:NOM as that:NOM dog:NOM

b. Tämä koira on tuo-ta koira-a iso-mpi.
 this:NOM dog:NOM be:PRS.3SG that-PART dog-PART big-CMP:NOM

比較級・最上級による形容詞活用がある。比較級を表すには *-mpi* という形態を用いる。比較対象となる名詞は、(8a)のように接続詞 *kuin* を用いる場合は基本的に主格形である。(8b)のように *kuin* を用いない場合は、比較対象となる名詞が分格形になり、形容詞に先行する。(8a)は書き言葉でも話し言葉でも用いられるが、(8b)は書き言葉でのみ用いられる。

(9) この犬がその犬たちの中で一番大きい。[最上級]

a. Tämä koira on nii-stä koir-i-sta iso-in.
 this:NOM dog:NOM be:PRS.3SG it:PL-ELA dog-PL-ELA big-SUP:NOM

b. Tämä koira on iso-in noi-sta koir-i-sta.
 this:NOM dog:NOM be:PRS.3SG big-SUP:NOM that:PL-ELA dog-PL-ELA

最上級を表すには *-in* という形態を用いる。比較対象となる複数名詞は出格をとる。出格は場所格の一つで「～の中から」という意味を表す。(9a)と(9b)は複数名詞と形容詞の語順が入れ替わっているが、これはどの要素を強調したいかによる。日本語により近いニュアンスを表すのは(9a)である。

(10) 今日はあの人はい来ない。[自動詞文の否定]

Hän ei tule tänään.
 3SG:NOM NEG.3SG come:PRS today

(11) あの人はその本を持って行かなかった。[他動詞文の否定]

Hän ei otta-nut sitä kirja-a (itse-lle-en).
 3SG:NOM NEG.3SG take-PAST.PTCP it:PART book-PART oneself-ALL-POSS.3SG

自動詞文でも他動詞文でも、否定動詞を用いることに変わりはない。他動詞の目的語は分格形になる。(11)のような過去形の否定は否定動詞＋過去分詞で表す。

(12) 全ての学生が参加しなかった／学生は全員参加しなかった。[数量の全部否定]

Kuka-an opiskelijo-i-sta ei osallistu-nut.
 who:NOM-PC student-PL-ELA NEG.3SG participate-PAST.PTCP

kukaan は(4)にも見られた不定代名詞で、否定文や疑問文で用いられる。(12)を直訳すると「学生たちの中からは誰も参加しなかった」となる。

(13) 全ての学生が参加したわけではない。[数量の部分否定]

Kaikki opiskelija-t eivät osallistu-neet.
 all:NOM student-PL:NOM NEG.3PL participate-PAST.PTCP.PL

部分否定は *kaikki opiskelijat* 「全ての学生たち」を主語とした否定文で表される。

(14) (私は買わなかった。しかし、決して) 値段が高いというわけではない。[文の否定]

Kallis hinta ei ole syy sille.
expensive:NOM price:NOM NEG.3SG be:PRS reason:NOM it:ALL

文全体を否定することはできない。(14)の日本語の意図を示すには, *kallis hinta* 「高い値段」という名詞句を主語とした「高い値段がその理由ではない」という文を作るしかない。

(15) 走るな! [禁止]

Älä juokse!
NEG.IMP.2SG run

禁止は否定命令文で表す。命令文における否定動詞は *älä* (2人称単数) もしくは *älkää* (2人称複数) である。

(16) 大きな声を出すな! [他動詞文の禁止]

Älä puhu kova-lla ääne-llä!
NEG.IMP.2SG speak loud-ADE voice-ADE

(16)の日本語は他動詞文の禁止の例として示されているが, フィンランド語では「大きな声」という目的語は *kovalla äänellä* 「大きな声で」という接格名詞句にするのが普通である。他動詞文の禁止の例としては, 以下の(16-cf)を示す。

(16-cf) あいつに本をあげるな!

Älä anna kirja-a häne-lle!
NEG.IMP.2SG give book-PART 3SG-ALL

禁止を表す否定命令文においても, 他動詞の目的語は分格形である。

(17) 明日は雨は降らないだろう。[推量の否定]

a. Mahta-a-ko-han huomenna sata-a?
can:PRS-3SG-Q-PC tomorrow rain-AINF

b. Sata-a-ko-han huomenna?
rain:PRS-3SG-Q-PC tomorrow

推量の否定を表す例としては, 平叙文でなく疑問文が得られた。(17a), (17b)はいずれも「明日は雨が降るのだろうか (いや, 降らない)」という反語的な表現である。動詞に付属する *-han* は話者の心理を表す小辞で, 様々な場面において用いられる。

(18) あの人に聞こえないように, 小さな声で話してくれ。[目的節の否定]

Puhu hiljaa, jottei hän kuul-isi.
speak:IMP.2SG quietly in.order.that:NEG.3SG 3SG:NOM hear-COND.PRS.3SG

目的節の否定は、接続詞 *jotta* と否定動詞 *ei* が融合した *jottei* によって表される。接続詞と否定動詞の融合は、フィンランド語によく見られる現象である。目的節の動詞は条件法である。

(19) 私はあなたを怒らせようと思ってそう言ったんじゃない。[否定のスキープの調節]

- a. En sano-nut niin, jotta vihastutta-isi-n sinu-t.
 NEG.1SG say-PAST.PTCP so in.order.that make.angry-COND.PRS-1SG 2SG-ACC
- b. En sano-nut niin suututta-a-kse-ni/ vihastutta-a-kse-ni
 NEG.1SG say-PAST.PTCP so make.angry-AINF-TRA-POSS.1SG make.angry-AINF-TRA-POSS.1SG
- sinu-t.
 2SG-ACC
- c. Sano-ma-lla niin tarkoitukse-ni ei ol-lut suututta-a/
 say-MAINF-ADE so purpose-POSS.1SG NEG.3SG be-PAST.PTCP make.angry-AINF
- vihastutta-a sinu-a.
 make.angry-AINF 2SG-PART

目的節としては、(18)と同様に接続詞 *jotta* を用いる(19a)のような構造と、(19b)のように A 不定詞変格形を用いる構造がある。A 不定詞変格形は主に目的を表す不定詞で、主語を示す所有接辞を必ず伴う。(18)の場合に A 不定詞変格形が用いられなかったのは、(18)の目的節が否定されていたからである。(19c)は「そのように言った私の目的は、あなたを怒らせるためではなかった」という構造で、*tarkoitukse-ni* 「私の目的」が主語となっている。*vihastuttaa*の方が*suututtaa*より強い怒りを表す。

目的語である「あなた」が(19a)と(19b)は *sinut* (対格形) に、(19c)では *sinua* (分格形) になっている。(19a)、(19b)の目的節は否定されていないので、節中の目的語「あなた」は対格形となる。これに対し、(19c)の「あなた」は主節となる否定文に含まれており、「否定文における目的語は分格形となる」というルールにしたがって分格形となる。

2.2. 連体修飾複文

(20) 私が昨日買ってきた本はどこ (にある) ? [内の関係の連体修飾節・目的語]

- a. Missä on kirja, jonka ost-i-n eilen?
 where be:PRS.3SG book:NOM REL:ACC buy-PAST-1SG yesterday
- b. Missä on (minu-n) eilen osta-ma-ni kirja?
 where be:PRS.3SG 1SG-GEN yesterday buy-AGT.PTCP-POSS.1SG book:NOM

(20a)は英語と同様の構造で、関係詞 *joka* を冠する関係節を用いた例である。(20b)は動作主分詞を用いた例である。動作主分詞は *-ma-* という形態をとり、名詞の属格形や所有接辞によって動作主を表す。副詞や、目的語となる名詞句は動作主分詞に先行する。ただし動作主分詞を用いた文は、話し言葉ではあまり用いられない。

(21) その本を持って来た人は誰 (か) ? [内の関係の連体修飾節・主語]

Kuka to-i se-n kirja-n?
 who bring-PAST.3SG it-ACC book-ACC

「その本を持って来た人」は関係節や動作主分詞構文で表すことができるが、(21)のような疑問文においては関係節を用いないのが普通である。つまり、疑問詞 *kuka* を主語とした文で表される。

(22) この部屋が私たちの仕事をしている部屋です。[内の関係の連体修飾節・場所]

a. Tämä on huone, jossa ole-mme tö-i-ssä.
 this:NOM be:PRS.3SG room:NOM REL.INE be:PRS-1PL work-PL-INE

b. Tämä on huone, jossa työskentele-mme.
 this:NOM be:PRS.3SG room:NOM REL.INE work:PRS-1PL

「仕事をしている」は(22a)の *olla töissä* というイディオムもしくは(22b)の *työskennellä* という動詞を用いる表現がある。*työskennellä* の方がやや堅い表現である。文の構造はいずれも関係節を用いたものである。「AはBだ」という文では、動作主分詞をあまり使わないようである。

(23) 足が一本折れたあの椅子はもう捨ててしまった。[内の関係の連体修飾節・所有者]

a. Ole-n jo heittä-nyt tuo-n tuoli-n pois, jonka jalka
 be:PRS-1SG already throw-PAST.PTCP that-ACC chair-ACC away REL:GEN leg:NOM

murtu-i.
 get.broken-PAST.3SG

b. Ole-n jo heittä-nyt pois se-n tuoli-n, jonka jalka
 be:PRS-1SG already throw-PAST.PTCP away it-ACC chair-ACC REL:GEN leg:NOM

murtu-i.
 get.broken-PAST.3SG

(23a)と(23b)の違いは、副詞 *pois* の位置のみである。この語順の違いに大きなニュアンスの違いはない。いずれも関係節を用いている。連体修飾節に名詞の所有者という情報が加わる場合、構造が複雑になるためか動作主分詞は使われない。

(24) ドアを叩いている音が聞こえる。[外の関係の連体修飾節]

a. Kuule-n, kun ove-en kopute-ta-an.
 hear:PRS-1SG as door-ILL knock-PASS-3SG

b. Kuule-n ove-en kopute-tta-va-n.
 hear-1SG door-ILL knock-PASS-PRS.PTCP-ACC

- c. Kuule-n ove-n koputukse-n ääne-n.
hear-1SG door-GEN knock-GEN sound-ACC

「ドアを叩いている音」のような、日本語における外の関係の連体修飾節は、(24a)や(24b)のように「ドアが叩かれている(時の音)」と表現するか、(24c)のように「ドアのノックの音」という名詞句で表現するかはわからない。多くの欧米言語と同様、外の関係の連体修飾節は存在しない。

(25) あの人々が結婚したという噂は本当(か)? [外の関係の連体修飾節]

- On-ko (se) huhu totta, että hän men-i naimisiin?
be:PRS.3SG-Q it:NOM rumor:NOM true that 3SG:NOM go-PAST.3SG married

「あの人々が結婚したという噂」は、「あの人々が結婚した」を従属節にして表すが、(24)と同様に連体修飾節は形成できない。

(26) 私はその人が来た時にご飯を食べていた。[時間節]

- a. Sö-i-n ruoka-a, kun hän tul-i.
eat-PAST-1SG food-PART as 3SG:NOM come-PAST.3SG
- b. Ol-i-n syö-mä-ssä ruoka-a, kun hän tul-i.
be-PAST-1SG eat-MAINF-INE food-PART as 3SG:NOM come-PAST.3SG
- c. Sö-i-n ruoka-a häne-n tull-e-ssa-an.
eat-PAST-1SG food-PART 3SG-GEN come-EINF-INE-POSS.3SG

時間節の表現には(26a)や(26b)のように接続詞 *kun* を用いるか、(26c)のように時相構文という構文を用いる。時相構文は E 不定詞内格形という不定詞を用いる。E 不定詞内格形は非定形動詞でありながら、所有接辞によって動作主を表すことができる。時相構文は話し言葉ではあまり用いられない。

(26a)と(26b)の違いは、主節に直説法の定形動詞を使うか、コピュラ動詞 *olla*+MA 不定詞内格形を使うかという点にある。(26b)で用いられているコピュラ動詞 *olla*+MA 不定詞内格形は、動作の継続あるいは「～しようとする(した)」という将前相のような意味を表す構造である。この構造は話し言葉でもよく用いられるが、(26a)や(26c)のように直説法の定形動詞で動作の継続を表すことも可能である。

(27) 私はその人が待っている所に行った。[場所節]

- Men-i-n paikka-an, jossa hän odott-i.
go-PAST-1SG place-ILL REL.INE 3SG:NOM wait-PAST.3SG

場所節は関係詞 *joka* の内格形 *jossa* を用いる。フィンランド語は関係詞も格変化する。

(28) 私はその人が走っていったのを見た。[補文節・視覚]

- a. Nä-i-n, kun hän juoks-i pois.
see-PAST-1SG as 3SG:NOM run-PAST.3SG away

b. Nä-i-n, että hän juoks-i pois.
 see-PAST-1SG that 3SG:NOM run-PAST.3SG away

c. Nä-i-n häne-n juokse-va-n pois.
 see-PAST-1SG 3SG-GEN run-PRS.PTCP-GEN away

補文節を表すには、接続詞を冠する従属節か、分詞構文を用いる。(28a)と(28b)の違いは接続詞の意味の違いにある。(28a)は「～する時」を表す *kun* による従属節で、(28b)は「～する(こと)」を表す *että* による従属節である。

(28c)は、現在分詞の属格形を用いた分詞構文である。主節動詞と分詞の動作主が異なる場合、分詞の動作主は名詞(あるいは代名詞)の属格形で示す。主節は過去形でも、過去の時点で同時進行していたとみなせる動作は現在分詞で表される。分詞構文は、話し言葉では使用頻度があまり高くない。

(29) 昨日の夜、私は彼らがしゃべっているのを聞いた。[補文節・聴覚]

a. Eilen illa-lla kuul-i-n, kun he juttel-i-ivat.
 yesterday evening-ADE hear-PAST-1SG as 3PL:NOM chat-PAST-3PL

b. Eilen illa-lla kuul-i-n, että he juttel-i-ivat.
 yesterday evening-ADE hear-PAST-1SG that 3PL:NOM chat-PAST-3PL

c. Eilen illa-lla kuul-i-n heidä-n juttele-va-n.
 yesterday evening-ADE hear-PAST-1SG 3PL-GEN chat-PRS.PTCP-GEN

聴覚に関する補文節も、接続詞を冠する従属節か、分詞構文を用いて表す。(28)と同様に、(29a)と(29b)の違いは接続詞の意味の違いにある。(29a)は「～する時」を表す *kun* による従属節で、(29b)は「～する(こと)」を表す *että* による従属節である。(29c)は現在分詞による分詞構文で、これも(28c)と構造は同じである。話し言葉ではこれもやはり使用頻度が低い。

(30) 私はその人が昨日ここに来たことを知っている。[補文節・知識]

a. Tiedä-n, että hän tul-i tänne eilen.
 know:PRS-1SG that 3SG:NOM come-PAST.3SG here yesterday

b. Tiedä-n häne-n tul-lee-n tänne eilen.
 know:PRS-1SG 3SG-GEN come-PAST.PTCP-GEN here yesterday

知識に関する補文節には、接続詞 *että* を冠する従属節か、分詞構文のどちらかが用いられる。接続詞 *kun* は時を表すというニュアンスを持つためか、使用されない。(30b)は過去分詞による分詞構文である。主節が表す時点では完了しているとみなせる動作は過去分詞で表される。

(31) (昨日) 彼は彼が今日ここに来たと言った。 / (昨日) 彼は、「私は今日ここに来た」と言った。
 [補文節・直接発話/間接話法]

- a. Eilen hän sano-i, että hän ol-i tul-lut
 yesterday 3SG:NOM say-PAST.3SG that 3SG:NOM be-PAST.3SG come-PAST.PTCP
 {sinne/ tänne} (juuri) {sama-na/ samaise-na/ sinä} päivä-nä.
 there here just same-ESS self.same-ESS it-ESS day-ESS
- b. Eilen hän sano-i tul-lee-nsa {sinne/ tänne} (juuri)
 yesterday 3SG:NOM say-PAST.3SG come-PAST.PTCP-GEN.POSS.3SG there here just
 {sama-na/ samaise-na/ sinä} päivä-nä.
 same-ESS self.same-ESS it-ESS day-ESS

間接話法の場合は接続詞 *että* を冠する従属節で表すか、分詞構文で表すかのどちらかである。「昨日」を従属節で表すには、*sama / samainen* 「同じ」の様格形あるいは指示詞 *se* 「それ」の様格形のいずれかを用いる。様格は本来「～の状態で、～として」という意味を表すが、時を表す名詞に後続する場合は「～に」という意味を表す。

直接話法については、以下のように表すのが普通である。

- c. Eilen hän sano-i, ”Tul-i-n tänne tänään”.
 yesterday 3SG:NOM say-PAST.3SG come-PAST-1SG here today

(32) 私はリンゴが (あの) 皿の上にあったのを食べた。[内在節・従主・主目]

- a. Sö-i-n omena-n, joka ol-i tuo-lla lautase-lla.
 eat-PAST-1SG apple-ACC REL:NOM be-PAST.3SG that-ADE plate-ADE
- b. Sö-i-n tuo-lla lautase-lla ole-va-n omena-n.
 eat-PAST-1SG that-ADE plate-ADE be-PRS.PTCP-ACC apple-ACC
- c. Sö-i-n tuo-lla lautase-lla ol-lee-n omena-n.
 eat-PAST-1SG that-ADE plate-ADE be-PAST.PTCP-ACC apple-ACC

(32a)は関係節を用いた表現である。話し言葉ではこの構造が最もよく用いられる。(32b)と(32c)は分詞構文である。(32b)と(32c)では分詞構文の時制が異なっているが、コンサルタントに確認したところ、状況に明確な違いは認められなかった。

(33) 私はネコが家に入ってきたのを捕まえた。[内在節・従主・主目]

- a. Ot-i-n kiinni kissa-n, joka tul-i koti-i-ni.
 take-PAST-1SG caught cat-ACC REL:NOM come-PAST.3SG home-ILL-POSS.1SG
- b. Ot-i-n koti-i-ni tul-lee-n kissa-n kiinni.
 take-PAST-1SG home-ILL-POSS.1SG come-PAST.PTCP-ACC cat-ACC caught
- c. Ot-i-n kiinni koti-i-ni tul-lee-n kissa-n.
 take-PAST-1SG caught home-ILL-POSS.1SG come-PAST.PTCP-ACC cat-ACC

(33a)は関係節を用いた表現である。話し言葉ではこの構造が最もよく用いられる。(33b)と(33c)は分詞構文である。いずれの分詞構文でも過去分詞が使われている。分詞の動作主は主節の目的語となるので、「猫」を表す *kissan* は対格形である。(33b)は「捕まえた」という動作を強調しており、(33c)は「家に入ってきたネコ」という目的語を強調しているが、大きな意味の違いはない。一般にフィンランド語では、強調される項が文末に位置する傾向が見られる。「捕まえる」という動作を表す *otin kiinni* の *kiinni* は副詞で、定形動詞と組み合わせた句動詞のような構造において用いられることが多い。

略号一覧

	英語	フィンランド語	日本語
-			形態素境界
./:			形態素境界あるいは意味境界 (分節不可の場合)
1	1 st person	1. persoona	1 人称
2	2 nd person	2. persoona	2 人称
3	3 rd person	3. persoona	3 人称
ACC	accusative	akkusatiivi	対格
ADE	adessive	adessiivi	接格
AGT.PTCP	agent participle	agenttipartisiippi	動作主分詞
AINF	A-infinitive	A-infinitiivi	A 不定詞
ALL	allative	allatiivi	向格
CMP	comparative	komparatiivi	比較級
COND	conditional	konditionaali	条件法
EINF	E-infinitive	E-infinitiivi	E 不定詞
ELA	elative	elatiivi	出格
ESS	essive	essiivi	様格
GEN	genitive	genetiivi	属格
ILL	illative	illatiivi	入格
IMP	imperative	imperatiivi	命令法
INE	inessive	inessiivi	内格
MAINF	MA-infinitive	MA-infinitiivi	MA 不定詞
NEG	negative	negatiivi	否定
NOM	nominative	nominatiivi	主格
PART	partitive	partitiivi	分格
PASS	passive	passiivi	受動
PAST	past	imperfekti ²	過去
PC	particle	partikkeli	小辞
PL	plural	monikko	複数
POSS	possessive	possessiivi	所有接辞
PRS	present	preesens	現在
PTCP	participle	partisiippi	分詞
Q	question particle	kysymyspartikkeli	疑問小辞
REL	relative	relatiivi	関係詞
SG	singular	yksikkö	単数
SUP	superlative	superlatiivi	最上級
TRA	translative	translatiivi	変格

² フィンランド語学では、いわゆる過去形は *imperfekti* (未完了形) と呼ばれ、現在完了・過去完了を表す *perfekti* (完了形) と対立する位置づけになっている。

参考文献

- Hakulinen, Auli, Maria Vilkuna, Riitta Korhonen, Vesa Koivisto, Tarja Riitta Heinonen, Irja Alho. 2004. *Iso suomen kielioppi*. Helsinki: Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.
- Lepäsmaa, Anna-Liisa and Leena Silfverberg. 2004. *Suomen kielen alkeisoppikirja*. Helsinki: Finn Lectura.

参考ウェブサイト

EUdict <http://eudict.com/>

執筆者連絡先: poutainen@hotmail.com

原稿受理: 2019年5月7日